

書の表現（潤渴と大小）

歳 森 芳 樹
Yoshiki Toshimori

書の表現方法は多岐にわたる。様々な相反する組み合わせの集合体といえるだろう。相反するもの、白黒・潤渴・大小・太細等少し考えただけでも幾つも出て来る。これらの組み合わせがしっくり収まった度合いが高いほど、観賞者にとっては良い作品に巡り会えたと感じる時であり、制作者にとってはある達成感を感じる時であろう。しかし制作者にとっては一瞬の事で仕上がった作を眺めているとその想いはもう次に向うこととなる。

今回作品を制作するにあたり、様々な相反する組み合わせのなかから、潤渴と大小を取り上げた。この二つの組み合わせは、書作品を構成する最も重要なものの一つといえます。作品を立体的に見せるためには、この潤渴と大小を上手く組み合わせることが大切です。これらの変化が乏しいと原稿用紙にボールペンで文字を書き並べたものようになります。草稿を作る段階から文字の大きさだけでなく、どの場所に墨の潤渴を入れより効果的な組み合わせとなるかと何種類も考えていきます。これが創作の時の楽しみの一つで、草稿が数多く作れるほど、仕上がりに幅が出来る、良い作に向かうことが多い

ように感じます。

さて本作は、文字の大小の差を大きくつけるため横作品とした。横作品では文字の背丈の差に加え、紙幅に余裕があり字幅に大きな変化をつけることが出来るからです。その大小の違いをより効果的に見せるため潤渴を加えていきますが、本作では、潤渴部をより意識した作品にした。潤筆部では文字はやや小さめにし凝縮部とし、渴筆部では大きな文字を、線に太細の変化を大きくつけ立体感と解放感を出し、渴部の活躍による視覚的效果を高めるよう工夫した。相反する表現の無限の組み合わせ。その一瞬の表現のための様々な工夫。まだまだ道ははるか先まで続いています。一歩でも先に進めるようこれからも努力を重ねるしかないと感じる作となった。

・用具用材 筆：兼毫筆

紙：台湾画仙

墨：和墨



35×136cm

白鹿昔成羣
樵子暮行下
鹿去誰復來
洞中雲自開